

## 収穫祭特集

### —収穫祭復活—

首都圏（東京・神奈川・千葉・埼玉）にある大学の数は国・公立が二十一大学、私立が二百四十八大学である。この時期、数多ある大学で学園祭が開催される。大学教育にとっても、学園祭を主催する学生にとっても大事なイベントである。本学の収穫祭は他大学とは異なり歌手・芸能人を招へいすることなく学生の、学生による、学生手作りの学園祭でもある。歴史は古く明治三十八年（一九〇五）（昭和十八年（一九四三））と昭和二十年（一九四五）を除いて今日まで連続と続いている。戦後初の収穫祭の思い出から綴っている。

.....



創立 68 周年収穫祭ポスター  
(昭和 33 年)

昭和二十年五月二十五日夜、B 29 の東京大空襲で、常磐松校舎は灰値に帰し、八月十五日正午、天皇の「終戦の詔勅」が放送され、国民は真夏の烈日の下に敗戦を知らされた。長い戦争に疲労困憊した国民の目に、この日の空は青く、まぶしく、静かであった。半世紀にわたって培った常磐松から世田谷に移転したが、収穫祭を開催する余裕はまったくなかった。

しかし、学生たちの間には、来年こそ伝統ある収穫祭を、という思いが徐々にふくらんでいったのである。

昭和二十一年十一月三日、世田谷本校構内で、復活第一回（通算第三十四回）の収穫祭を開催した。移転先の旧陸軍機甲整備学校は荒れ放題で、戦車や装甲車の残骸があちこちに放置してあり、庭も堀りかえされて石ころだらけである。衣食もとぼしく学生たちは炎天下に裸になりイモをかじりながら、黙々と整備を続けようやく開催にこぎつけたのだ。

「数日來の薄曇りも晴れた。輝かしき民主憲法発布の朝、早慶戦とともに待望の江戸名物農大運動会は世田谷の本学において挙行された。

街頭宣伝（写真）の効果で朝早くから詰めかけた観衆は開会おそしと待ちかまえる。八時開会。学長の挨拶でマラソン、買い出し競走と始まり趣向を変えて、飢餓都民救済、提灯・カローリ補給・肥培の各競争に、父兄、校友、来賓、在校生多数参加し珍風景続出に観衆を喜ばせた。」と『農大新聞』再刊第二号の記事も躍っている。

農大収穫祭の人氣が余興（集団野外演劇）に集中するのは昔からだが、復活第一回の出し物は、次の通りである。「何が彼女をそうさせたか」（学部）、「花咲翁」（予科）、「日本の絵」（専門部農学科）、「幸福アチャコチャ」（専門部農芸化学



復活第1回収穫祭宣伝隊  
(昭和21年)

科)、「パイオニア」(専門部農業拓殖科)、「平和の鐘が鳴る」(専門部農業土木科)、「豊年踊り」(専門部農村経済科)、「緑地の神を迎えて」(専門部緑地土木科)。

農大新聞の記事にある「街頭宣伝競争」は、収穫祭に先立つ十月二十七日に行われたが、これは本学独特の画期的な企画であって、荒廃した瓦礫の街を行く人々の目を見張らせ、農大のイメージを多くの人々の脳裏に焼きつけさせた。

ところで、この宣伝隊は、銀座のど真ん中で、「青山ほとり」の踊りを披露し、道行く人々の度肝を抜いた。何事ならんと集まった人々は、農大生と知って「なるほど」と納得し、「農大健児はすまないがお米の実る木がついている 昔も今も変わらない 人間喰わずに生きらりよか…」と歌うに及んで、どっと拍手がわきおこった。だれもが飢えていた時代だったのである。

これ以後、毎年の収穫祭にはプラスバンドを先頭に、花や野菜を満載した馬車を銀座、新橋、新宿、渋谷などに繰り出すようになった。こうし

て農大収穫祭は戦前とは違った意味で都民に親しまれるようになったのである。

余談になるが、復活第一回の収穫祭には、進駐軍兵士が何事ならんとジープで駆けつけてきたが、大会役員から事情を聞くと、「Good Celebration」と叫んで、自分も参加したい様子を見せていたという。

昭和二十二年十一月二日、三日、体育競技と野外劇を含めた収穫祭を開催すると共に、校舎の全部を開放して、農学展を催した。これは後年の文化学術展の始まりで、農学研究者のみならず、一般の人々への農学知識の普及となったのである。終戦直後の収穫祭について、校友の磯山和男(昭和二十八年、農業経済学科卒)は、次のように回想している。

「私は昭和二十二年に専門部農村経済科に入學し、二十八年に農業経済学科を卒業した。入學当時の農大は、陸軍機甲整備学校跡地に移転して二年目、校内にはまだ戦中の防空壕や運転教習施設などの跡が残っていて、特に収穫祭を行うグラウンドには、雑草あり砂利ありで、収穫祭が近づくにつれ、各科順番でグラウンド整備に汗したものだ。私にとって収穫祭での一番の思い出は、田舎っぺ一年生ときの野外劇である。」(『学生生活の思い出』より抜粋引用)

昭和二十七年十一月二日、運動会のみ収穫祭が開催された。このときの収穫祭実行委員長加藤日出男は、『青山ほとり』を歌いながら踊るのに、「だいこんを持ったらどうか」と提案した。この

アイデアが採用されて人気を呼び、「だいこん踊り」としてすっかり定着してしまった。(後述)

昭和二十八年十一月一日、第一回茂原分校収穫祭が開催された。これまで茂原分校は、本校の収穫祭に合流してきたが、なにぶんにも遠隔地であることと、地方への宣伝のこともあり、分校独自で行うことにしたのである。これは昭和三十六年四月、分校が本校へ合流する前年前まで、茂原市の名物として地元の人々の目を楽しました。昭和三十三年の『農大新聞』第三二四号は、茂原分校収穫祭を次のように報じている。

「第五回収穫祭は十月二十七日、同分校グラウンドで盛大に繰上げられた。二十七日は絶好の



収穫祭宣伝馬車(昭和25年頃)



第79回収穫祭宣伝隊  
(昭和46年)

であった。しかし、戦後十数年を経過し、社会の進展と共に収穫祭の企画にも転換のきざしが見えはじめた。昭和二十二年に農学展を加えたことが好評で、その後毎年強い要望があったにもかかわらず実現するに至らなかった。そこで、夏休み明けの会合で正式に決定され、その後各方面に働きかけ、ついに第一回の「文化学術展」を開催するのはこびになったのである。この文化学術展には、各研究室、農友会の各部、自主的サークルなどが積極的に参加した。

戦後十年以上を経過して、すっかり定着した収穫祭は、学生の情熱を表徴して年毎に盛大になっていき、これに加えて文化芸術展は近代農業に貢献しようとする農学徒の真面目を発揮して、収穫祭をより有意義なものにしたといえるだろう。

○ 大根踊りと収穫祭

収穫祭の花の一つに挙げられるのは何といっても全学応援団のリーダー公開であろう。数あるリーダー演技の中で極め付きは「青山ほとり」、通称「大根踊り」である。

この誕生の秘話・逸話は昨年の大学史資料室通信第6号「収穫祭特集号」(二〇一四年十一月一日発行)で披露したので、併せてご覧いただきたい。

○ 宣伝隊の思い出

さて、私が応援団に関係を持ったのは、助手に

採用された昭和五十年(一九七五)からである。丁度研究室に上西宗市君(当時応援団総務部長)が在籍しており、私に「応援団を見てくれませんか」と話があり、しばらくして当時顧問をされていた金木良三教授に呼ばれ学内相談役を依頼されたのが始まりである。以来平成二十三年(二〇一一)に満期退職するまで三十五年間の長きにわたって応援団の学生と師弟関係を持った。その時の学生が今、親として子供を農大に進学させている。また、親子、兄弟で応援団幹事を務めた人達もいる。



収穫祭宣伝隊 大根配る(昭和27年頃)

秋日和に恵まれ、午前九時開会合図の花火とともに千葉学長、杉野収穫祭本部長の挨拶の後、多彩な催物に入り運動競技の中に市内婦人会の踊り、幼稚園児童の遊戯、中学生のダンスなどに市民との親睦は一層深められ、一時頃よりお国自慢の郷土民謡踊りの始まる頃は、観衆五、六千名もつめかけ、千葉学長のカッポレ飛入りもあり、四時半頃全学生のファイアーストームで青山ほとりを元気に愉快に踊って幕を閉じた。」

この記事を読むと、茂原分校の学生が収穫祭を通じて、いかに地元の人たちと融和していたかがわかるのである。

昭和三十二年、第四十五回収穫祭は、十一月一日、二日、三日の三日間にわたって本学の内外で盛大に挙行されたが、特筆すべきことはこの年から「文化学術展」が新たに加わったことである。

これまでの収穫祭には、文化学術方面のプログラムが組み込まれてなく、その中心は集団野外演劇



近付新聞社読楽有ムスト収穫  
東京農業大学全學應援團史から転載

昭和五十二年の付き添いでの出来事は今でも忘れられない。団長が杉山博一君、副団長兼宣伝隊長が望月保秀君の時である。昼飯を皇居の土手で取った後、隊列を整え銀座の数寄屋橋際で宣伝活動を行うためそこに到着した。

吹奏楽がラップを吹き始めた途端マイクで雷が落ちた。「私が話しているのに何だ！。どこの学生だ！」。話していたのは大日本愛国党赤尾敏総裁、その人であった。

「望月、言って話してこい。農大の事、収穫祭の事、俺も後から行くから」

そばの警察派出所に行き許可証を見せると、赤尾総裁は毎日ここで演説をしているとの事、野菜をもって私も総裁の車に行きお会いした。小柄だが目のぎよろりとした迫力ある方であった。「農大の野菜です。どうぞ」と渡し大学のこと、収穫祭の事など話をした。「わかった、上で見ているから農大の宣伝をやりなさい」。街宣車の上のパイプ椅子に座り見ていた。私達の演技が終わわり、挨拶をすると、総裁はマイクを持ち、「今時の学生は元気があってよろしい。農大の収穫祭の宣伝学生なそうだ。頑張れ！」

激励の言葉を背に私達は次の渋谷に出発した。

色々な思い出が走馬燈のように頭をよぎる。大雨の中目黒駅前でのずぶぬれの大団旗、「ハンディキャップの学生に対し農大はどう対応しているのか」と話しかけてきた女性等々…。

当時の収穫祭の思い出が走馬燈のように次々

に思い出される。

第一二四回の収穫祭が農大生だけではなく、お出で頂く方々の心に残るともし火になることを念じている。

名誉教授 内村 泰



### 第一二四回収穫祭ポスター

当資料室では東京農業大学史に関する資料をひろく収集しております。東京農業大学史関係資料や、各種情報などがございましたら、どのようなことでも結構ですので、左記まで、一報くだされば幸いです。

東京農業大学

図書館 大学史資料室

〒156-8502

東京都世田谷区桜丘1-1-1

電話… 03-5477-2526

FAX 03-5477-2546